

詩，あるいは死について

淵野 昌

ドイツ語の詩の教科書のようなものを先日買った。その中の詩の日本語訳があまりにもひどかったので、自分の翻訳を試みてみた — 後で気が付いたのだが、訳出したのは、偶然、どちらも、死、しかも生きている者を甘い誘惑でさそうような死をテーマとした短詩である。昼が私を疲れさせたのかもしれない。蛇足かもしれないが、ハイネの詩では韻までちゃんと訳出していることに気づいてほしい。

死 それはひんやりとした夜だ
ハインリッヒ・ハイネ

死 それはひんやりとした夜だ
生はといえば蒸暑い昼である
もう暗くなって私は眠くなった
昼が私を疲れさせた

大木が私のベッドの上に枝を拡げる
あのわかやいだ夜鳴き鶯が歌いはじめた
歌うのは恋の歌ばかり
それは夢の中にまで聞こえてくる

Der Tod, das ist die kühle Nacht
Heinrich Heine (1797–1856)

Der Tod, das ist die kühle Nacht,
Das Leben ist der schwüle Tag.
Es dunkelt schon, mich schläfert,
Der Tag hat mich müd gemacht.

Über mein Bett erhebt sich ein Baum,
Drin singt die junge Nachtigall;
Sie singt von lauter Liebe,
Ich hör es sogar im Traum.

薔薇よ おお矛盾以外の何物でもないものよ ...
ライナー・マリア・リルケ

薔薇よ おお矛盾以外の何物でもないものよ こんなにも
沢山の瞳うたの下で誰のものでもない眠りとなる
よるこび

Rose, oh reiner Widerspruch...
Rainer Maria Rilke (1875–1926)

Rose, oh reiner Widerspruch, Lust,
Niemandes Schlaf zu sein unter soviel
Lidern.

リルケの詩の訳の最後から2行目で“瞳”とルビをふったのは、原詩で、ドイツ語の“瞳”の複数第3格 (Lidern) と“歌”の複数第3格 (Liedern) が同じ発音であることをかけていることにちなんでいる。実際、リルケは実際この掛りを意識して“Lidern”という言葉を選んだようである。その証拠に彼自身によるフランス語訳では、この単語は、フランス語の“歌”という単語 (chants) に訳されているのである。

蛇足だが、同音語の掛りでしめくくられる短詩ということで思いだされるものに、滝口修造 (1903-1979) の「遮られない休息」がある。これは武満徹の同名の初期のピアノ曲にインスピレーションを与えた詩としても知られている。

遮られない休息
瀧口修造

跡絶えない翅の
幼い蛾は夜の巨大な瓶の重さに堪えている
かりそめの白い胸像は雪の記憶に凍えている
風たちは痩せた小枝にとまって貧しい光に慣れている
すべて
ことりともしない丘の上の球形の鏡

そういえば多和田葉子の最近の小説に「球形時間」というのがあった。彼女がその題をつけたときに滝口修造の詩が頭にあったのかどうかはぜひとも聞いてみたいものだと思う。